

幼児期の仲間関係における
ユーモア行動を育む協働的保育の一事例
－笑われる子から笑わせる子へ－

伊 藤 理 絵

研究紀要第54号 抜粋

岡崎女子大学
岡崎女子短期大学

令和3年3月15日発行

幼児期の仲間関係におけるユーモア行動を育む協働的保育の一事例 —笑われる子から笑わせる子へ—

伊藤 理絵*

要 旨

本論では、人を笑わせる行動（ユーモア行動）の多い幼児が、仲間関係において攻撃対象になりやすい傾向がみられたことから、園全体で支える保育を行ったことによる幼児の変化の一事例をまとめた。仲間との関わりの中で、ユーモア行動を見せては仲間を笑わせることの多い年長児のヒロキ（仮名）は、仲間から「笑ってもいい子」と見なされているのか、行き過ぎたツッコミによってヒロキが悲しみの表情を見せると、それすら笑われてしまう子でもあった。ヒロキに対するいじめに発展していく可能性を捨てきれないと判断した園長は、園全体でヒロキを支えていく必要があるとして、クラス担任と教職員が一体となって、ヒロキへ関わることにした。その約2週間後、いつものようにヒロキへの行き過ぎた行動が起きた時、ヒロキが初めて相手に対し、大きな抵抗を示し、大喧嘩となった。介入して約1カ月後には、ヒロキに行き過ぎたツッコミをしていた男児が、ヒロキをかばう姿も見られるようになった。幼児期にみられる“いじめの芽”に対して、笑わせる子どもが、仲間とともに笑っているのか、笑われる対象となっていないかを園が一体となって協働的に子どもに関わり、時に、外部の視点も取り入れながら適切に判断し、保育を行うことの重要性を示唆する事例であると思われる。

キーワード：笑われる、ユーモア、仲間関係、いじめ、協働的保育

I. 背景と目的

幼児期の攻撃行動および攻撃的笑い（攻撃行動に伴う笑い）の研究では¹⁾²⁾³⁾、幼児期において、仲間との笑いは親和的笑いが多いものの、笑いの受け手にとっては傷つく笑いとなる場合があること、他者を攻撃するために笑いが用いられることがあること、笑われることは悲しいことであると説明できるようになることが示されている。年長児の自由遊び場面で見られる攻撃行動の観察研究では⁴⁾、身体的・言語的攻撃による「直接的攻撃」は男児が男児に行っており、そのほとんどが個人から個人に対して行われている一方で、無視等の間接的な方法で相手を傷つける「関係性攻撃」は、約半数が集団から個人に対するもので、女児が女児に対して行っていた。また、幼児期の男児の攻撃行動の特徴として、直接的攻撃のうち、物を獲得するために相手を叩くなどの「直接的・道具的攻撃」が多く、だれもが攻撃する側・攻撃される側となっていた。

年長児において、仲間に対する攻撃・拒否的行動がいじめの性質を伴う場合があるとして、女児の事例が報告されている⁵⁾。そこでは、明確にいじめが起きていることを示すものではないとしても、また、子どものいざこざの全てを「いじめの芽」と捉えて禁止するのではないとしても、保育者が「何か様子がおかしい」といじめのサインを敏感に感じ取れるよう、日常の子どもの様子を熟知し、日頃から仲間関係を探ることが必要であるとしている。

先行研究では⁵⁾、女児全体に一人の女児をターゲットに「攻撃してもよい」という雰囲気形成され、攻撃・拒否的攻撃が行われるようになった事例が報告されている。本論では、類似の性質をもった男児の事例として、筆者がこれまでに行ってきた子どもの笑いと言撃行動に関する観察記録⁶⁾から、ヒロキ（仮名）の事例を取り上げる。ヒロキに対する「いじめの芽」に対して、園全体が敏感に感じ取り、仲間関係を深める保育を担任だけに任せずに行ったことで、被害を受けやすかったヒロキを取り巻く仲間

*岡崎女子短期大学

関係が変化した事例である。筆者は、以前、ヒロキの事例について、以下のように記したことがある⁹⁾。

観察期間中に保育者と子どもの笑いについて話し合う機会があった。その中で、保育者が“気になる笑い”として、特定の男児が笑われる対象になっていることを挙げ、いじめの可能性を考慮し、保育所全体でその問題について話し合い、対応したことがあった。保育者が協働して笑われる側になりやすい男児の言動を肯定する声掛けを意識的に行うことで、他者からの攻撃的行動を受けるだけだった男児が、攻撃してくる相手に自己主張するようになり、その場面を見た他の幼児が男児を援護する場面も見られた。

本論は、この時の保育所(以下、園)での子どもの仲間関係の経緯について、“いじめの芽”に対して全保育者で協働的に取り組むという意識により、他児からの攻撃や笑われる対象となっていたヒロキを取り巻く仲間関係と、ヒロキ自身の仲間に対する言動に起きた変化についてまとめる。

なお、本論では、笑いとユーモアを上野(2003)⁷⁾の定義に則り、笑いは、ユーモアという心理的現象が行為となって表れたものであり、ユーモアは「おもしろい」「おかしい」といった心の中に沸き上がる気持ちるを指す。また、相手からの笑いを取るきっかけとなったり、時に、他者へ伝染することもあったりする子どもの「ふざけ行動」(掘越, 2018)⁸⁾のようなユーモアを表出する行動については、「ユーモア行動」と表記する。ただし、ユーモア行動の受け手にとって不愉快さや悲しみなどネガティブ感情を生起させるユーモア行動については、「ネガティブなユーモア行動」として区別する。

II. ヒロキの事例の概要

観察の協力が得られた園は、年少組と年中組の合同クラスと年長組で構成されている。本論で取り上げる年長組(観察対象児：男児5名・女児14名)のヒロキは、クラスの中でも積極的にユーモア行動を行い、笑わせる秘訣をも自覚しているかのような発言をする子であった。しかし、一方で、仲間関係においては普通の遊び仲間であるアキラとテツヤからだけでなく、クラスの女児からも、ヒロキに対する威圧的な言動がみられることがあり、攻撃行動の被

害児になりやすい子でもあった。

アキラからヒロキに対する行き過ぎたツッコミのエピソードとして、2月中旬の給食時間の出来事⁹⁾¹⁰⁾を以下に示す。ヒロキが仲間を積極的に笑わせるユーモア行動と、ユーモア技法を理解しているかのような発言(「(何度もすると)もう面白くなっちゃうよ。」)をみせるエピソードであると同時に、アキラの行き過ぎたツッコミにより、ヒロキにとっては笑えない状況さえも、周囲の仲間にはユーモア行動に受け取られている姿を示している(以下、エピソードの下線は筆者による)。

エピソード：仲間と共有できない笑い

ヒロキ(6歳3か月)、アキラ(6歳10か月)、マイ(6歳10か月)、ユウコ(6歳0か月)は同じグループであり、給食の時間、同じテーブルで食事をしている。アキラが映画の話を始めると、その映画に登場するキャラクターが「ようこそ、ヒマラヤへ」と言うシーンが話題になる。ヒロキが「ようこそ、ヒマラヤへ」と真似をすると、ヒロキとアキラは2人で声を上げて笑い合う。ヒロキは、その真似を3回繰り返し、その度にアキラは面白がって声を上げて笑い、ヒロキも声を上げて笑う。ヒロキが今度は向かい側に座っているマイにも真似して見せ、2人でにこにこ笑い合う。それを見て、ユウコが「(私にも)見せてー。」と笑顔で言うと、ヒロキは「(何度もすると)もう面白くなっちゃうよ。」と言いつつも、笑顔で真似して見せる。それを見て、ユウコもにこにこ笑って面白がる。そして、今度は、ヒロキ、アキラ、ユウコの3人でにこにこ笑いながら、何度も一緒に真似し合う。

盛り上がる中で、アキラが笑顔でヒロキの頭を叩き出す。すると、ヒロキからは笑顔が消え、痛そうな顔をするが、ユウコとマイはにこにこ笑って見ている。ヒロキは、アキラに叩かれてしかめ顔のままであった。

ヒロキとアキラは、給食が同じグループということだけでなく、日頃から一緒に過ごす仲間関係にあるが、ヒロキのユーモア行動に対して、アキラが度々行き過ぎたツッコミを見せていた。アキラにとっては、ヒロキの行動が面白く、いわゆる「いじってもいい子」という認識があったのかもしれない。しかし、アキラが友達への関わりとしてヒロキに対して行う行為が、ヒロキにとっては受け入れられないも

のであることがしばしばあった。普段の遊び仲間ではない複数の他児からは、ヒロキに対して攻撃的と思われる言動を向けられることも見られていた。

他児とヒロキの思いのズレが多いという印象は、ヒロキを取り巻く仲間関係について、筆者にとって予備観察から「何かおかしい」と感じるものであった。園長に相談したところ、園長も同じ思いをもっていたことが分かった。そこで、予備観察および本観察前半が終了した時点で園内報告会を開くことにし、園長が「気になる笑い」を取り上げる中で、筆者からの見解を述べることにした。

園内報告会では、担任保育士もヒロキのことやヒロキに向ける周りの態度、時折、いつも遊んでいるアキラがヒロキを叩いている様子が気になっていたものの、個別の配慮が必要な複数の子どもたちへの対応に追われていたこと、ヒロキが気になりながらもヒロキにまで手が回らないという悩みが語られた。それを受けて園長より、担任だけに任せず、園全体で見ていくこと、いじめの可能性、もしくは、いじめに発展する可能性が少しでも考えられるのであれば、尚更、教職員一体となって対応すべきという方針が出され、次の日から、教職員全員で担任保育士をサポートしていくことになった。

以下、ヒロキを取り巻く仲間関係について取り上げた園内報告会の前に得られた事例を「介入前」、園内報告後に行った観察で得られた事例を「介入後」として、ヒロキの介入前後の経緯をまとめていく。本観察で得られたヒロキのエピソードは、年長児257エピソードのうち、介入前 24 エピソード、介入後 14 エピソード(うち担任との関わりが3 エピソード)であった⁽²⁾。

Ⅲ. 介入前後のヒロキの変化

(1) 介入前 (エピソード1~10)

「笑われる子と見なされているヒロキ：仲間関係における攻撃対象の段階」

介入前の観察記録から、ヒロキを取り巻く仲間関係について図1にまとめた。先述したように、ヒロキはアキラともっとも近い関係性にある。アキラは、ヒロキに対して一方的なツッコミ(ネガティブなユーモア行動)を行うことがあるが、ヒロキもまたアキラにとってネガティブなユーモア行動をし、それを嫌がるアキラを笑うことがあった(エピソード1)。

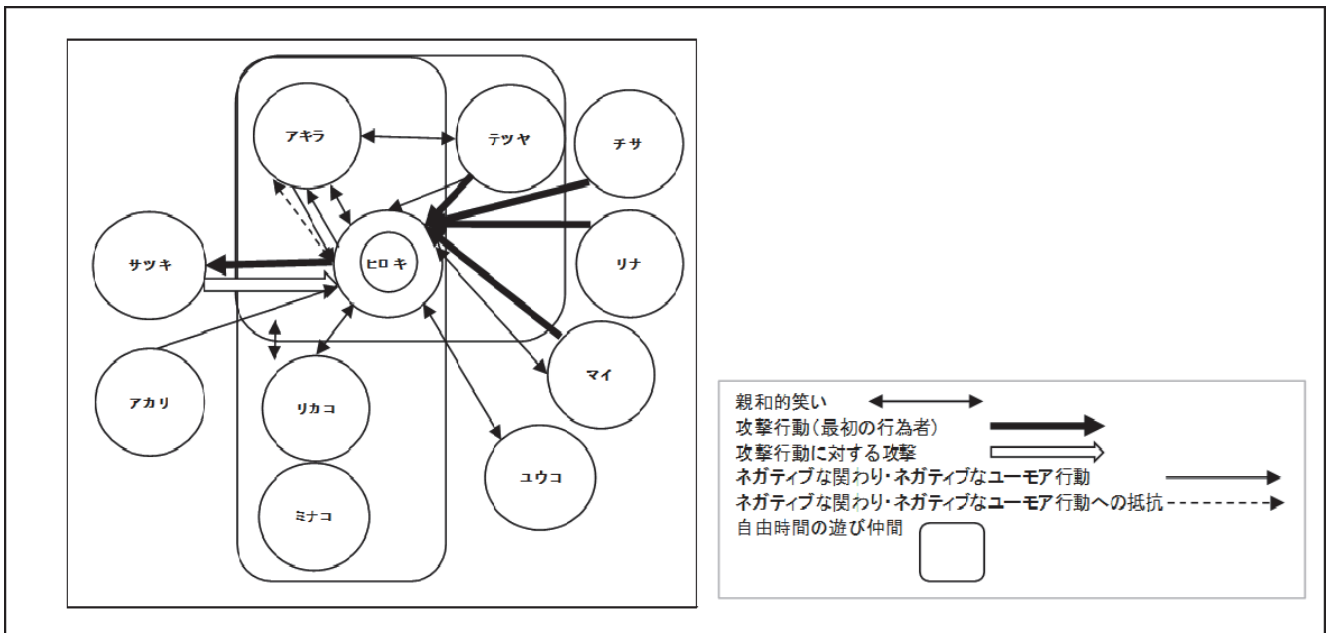


図1 介入前のヒロキの仲間関係

エピソード1：アキラを笑うヒロキ

ヒロキ(6歳3か月)、アキラ(6歳10か月)、リカコ(6歳2か月)、ミナコ(6歳2か月)が、ごっこ遊びをしているようだ。アキラは「お姉ちゃんに知らせて。」とリカコとミナコに言うと、目をつぶり、気絶したふりをする。ヒロキが気絶したふりをするアキラを押していく様子を見て、リカコがにこにこ笑う。ヒロキに押された勢いで、アキラがひっくり返って仰向けになると、リカコは「キャハハ」と声を上げて笑い、アキラもにこにこ笑う。その姿勢のままアキラが何か話を始めるが、ヒロキは「バーン、ババババババ」と言いながら笑顔でアキラを叩き始める。それを見て、ミナコもにこにこ笑うが、アキラは起き上がると、「痛い!!」と言ってヒロキの頭を叩く。叩かれたヒロキはにこにこ笑い、リカコとミナコも笑顔でヒロキとアキラを見ている。アキラが立ち上がって走り出し、その後ろを3人がついていく。

先述したエピソードやエピソード1から、ヒロキとアキラは互いにツッコミ合う仲にも思えるが、遊びはアキラ主導で進められることが多い。また、アキラは、自分の失敗をヒロキに転嫁するようなネガティブなユーモア行動を行うことがあった(エピソード2)。

エピソード2：失敗をヒロキに転嫁するアキラ

アキラ(6歳10か月)がテラスに置いておいた水が入ったカップのうち、氷が張ってあるアヤマ(6歳2か月)のカップを保育室に持ってくる。カップから氷を取り出し、水道の前で触っている様子をヒロキ(6歳3か月)が傍で見ています。アカリ(6歳9か月)がやって来て、アキラに「アヤマちゃんのいいのー？勝手に取って。」と言うが、アキラは「いいの。」と言って触り続けている。しかし、アキラが「見るー。」と言って振り向いた時、氷を落としてしまう。アキラは「あー!」と叫んだ後、「ヒロキー!」と笑ってヒロキを見てから、氷を拾う。ヒロキはアキラが氷を拾う様子をじっと見ている。アキラは氷を拾い、セイコ(6歳7か月)に見せに行く。

他児もまた、ヒロキが悪いわけではないことに対して、攻撃行動を向けることがあった(エピソード3~4)。

エピソード3：順番を守らないテツヤ

給食のため、年長組が自分のカバンを持って遊戯室へ向かう(この時期、年長児は小学校への接続期で午睡がなく、年長組の部屋は、年中組・年少組の午睡部屋になっていた。年中組・年少組の午睡時間は、年長組は遊戯室での給食後、自由時間となっていた)。この日は、カバンをスタンドに掛けた子から、自分の縄跳びを取り出して跳び始めている。それを見た担任保育士は、給食のためのテーブル出しをする前に一人ずつ駆け足跳びで遊戯室を一周することにしている。

担任保育士が一列に整列するよう声をかけると、ヒロキはサツキ(6歳7か月)の後ろに並ぶ。すると、後からやってきたテツヤ(6歳1か月)がヒロキに「危ない!」と言い、ヒロキはテツヤの後ろに下がる。

エピソード4：ヒロキだけを責めるマイ

ヒロキ(6歳3か月)が担任保育士に縄跳びをしまう時の結び方を教えてもらっている時に(エピソード5参照)、ヒロキと同じ給食グループのマイ(6歳10か月)は、給食に向けて折り畳みのテーブルが置いてある所から「アキラくん！ヒロキくん！」と呼んでいる。しかし、アキラ(6歳10か月)には聞こえておらず、ヒロキも担任保育士から縄跳びの結び方を教えてもらっているため、聞こえていない。マイは「いいや。」と言って、テーブル置き場から離れるが、どのグループもテーブルを出していない状況に気づいた担任保育士が「あれえ?」と言って、全体に呼びかけ、机が全く準備されていない状況を伝える。すると、マイは「だって3グループさん、呼んでも来ないんだもん。」と言いながら、テーブル置き場へ戻っていく。近くにヒロキがやって来ると、マイは強い口調で責めるように「ヒロキ!」と呼び捨てた後、ちらちら私(筆者)を見る。ヒロキは「はい。」と弱々しく返事し、マイと、2人でテーブルを出す。

また、ヒロキが気付かないところで、ヒロキに向けて攻撃的な言動や、非親和的な笑いが発せられることもあった。(エピソード5~7)。こうしたヒロキに対する他児のネガティブな関わりは、アキラ以外の幼児とは、給食の準備やクラス全員でのゲームを行う場面など、集団活動が求められる時間に見られる傾向にあった。

エピソード5：ヒロキを認めないテツヤとリナ
 ヒロキ(6歳3か月)は一周して戻ってくると、テツヤ(6歳1か月)の傍へ行き、「テツヤ君、速く回して跳ぶから見て」と言ってみせる。しかし、テツヤはあまり関心がなさそうである。その様子を離れた所から見ていたリナ(6歳4か月)が「みんなそれぐらいできるよ！それよりもっと速いし！」と叫ぶが、ヒロキには聞こえていない。ヒロキは、夢中で縄跳びを跳ぶと、「せんせー」と担任保育士の所へ行き、縄跳びをしまう時の結び方を教えてもらう。

エピソード6：ヒロキにだけ投げつけるチサ
 チサ(6歳7か月)が、クラスの子の名前を呼びながら連絡帳を手渡しで返している。しかし、ヒロキ(6歳3か月)にだけは、手渡しせずに投げつけて返す。

エピソード7：鬼になったヒロキを笑うアカリ
 年長組全員でフルーツバスケットを行う。担任保育士が、鬼を決めるため「今日は2月16日から…。16人もいないな。1と6を足して7。ここから7人目の人にしよう。」と言ってアヤマ(6歳2か月)から反時計回りに「1、2、3…」と子ども達の頭を触りながら数えていく。7番目はヒロキ(6歳3か月)。担任保育士はヒロキの前で止まり「…7。はい、鬼お願いします、最初。」と言ってヒロキの椅子を引き、立つように促す。それを見てアカリ(6歳9か月)は、「アハハハ」と声を上げて笑い、すぐ真顔になる。ヒロキは、アカリの笑いに気づいていなかった。

一方で、ヒロキは、いつも攻撃を受ける側になっているわけではなく、他児から自分がされているよ

うに、特定の女兒(サツキ)に振る舞う姿が見られた。しかし、その場合、ヒロキから攻撃的な言動をされたサツキも抵抗を示しており、ヒロキの一方的な加害行動ではなかった(エピソード8)。

エピソード8：他児に向けたヒロキの攻撃行動
 給食準備中、ヒロキ(6歳3か月)がスキップをしているとサツキ(6歳9か月)にぶつかり、転んでしまう(この時期、音楽あそびの時間にスキップや側転をしていた)。
 ヒロキが「いたい！」と叫ぶと、ヒロキの声に気付いた担任保育士は「押さないでね。」とサツキに伝える。席に戻っていくサツキに対し、ヒロキは後ろから「押すな！」と言い、サツキを叩く。サツキは振り返ってヒロキを睨むと、ふんつと前を向く。ちょうどその時、私(筆者)と目が合ったサツキは、私ににっこり笑いかける。

エピソード8は、ヒロキが給食の準備を行う時間にスキップし、自らサツキにぶつかって転んでいるため、サツキが悪いわけではない。むしろ、ヒロキの転倒は、規範から逸脱した行動の結果なのだが、担任保育士は「痛い！」というヒロキの言葉に反応し、ヒロキが押されたと思っている。サツキにとって、担任保育士の関わりは納得できないものであっただろうが、担任保育士が、普段からヒロキが被害を受けやすいということを気にしており、ヒロキに対する攻撃的な行動を止めたいという思いからの働きかけであった可能性がうかがえる。

先述したように、ヒロキの遊び仲間のアキラとは、一方的に攻撃を受けるだけの関係ではない。普段からユーモラスな行動を積極的に行うヒロキが、アキラを笑わせようとする行動をし続けて、最終的にアキラと笑い合う場面もみられた(エピソード9)。エピソード9の後も、ヒロキ、アキラ、リカコ、ミナコは4人で遊んでおり、ヒロキがしてみせる物真似を見て、4人で笑い合う場面が見られている。

エピソード9：ユーモア行動をし続けるヒロキ

アキラ(6歳10か月)は駆け足跳びをしてからリカコ(6歳2か月)とミナコ(6歳2か月)の所へ行くと、持っていたとびなわを束ねてダンベルのように持ち、その手で配膳台を叩く。そして、リカコに束ねたとびなわを持たせると、リカコはアキラの真似をして笑顔で配膳台を叩く。次に、アキラはミナコにとびなわを渡す。ミナコがとびなわを鉄アレイに見立てて、重くて持ち上げられないふりをする。すると、アキラは「重いんだよー。」と言って、ヒロキ(6歳3か月)に持たせるが、ヒロキは何もせずに立ったまま。アキラは「重いんだよ。重いってやれ。早くー。」と言い、ミナコがケラケラ声を立てて笑う。ヒロキは束ねたとびなわを持ったまま両手を上げると、屈伸して「重い。」とにこにこ笑っておどけてみせる。それを見て、ミナコとリカコが声を上げて笑うが、アキラは「だーめー。」と言ってヒロキからとびなわを取り上げる。ヒロキはにこにこ笑っている。アキラは「重い。」と念を押して、再びヒロキにとびなわを持たせるが、受け取ったヒロキは軽々と手を上に挙げる。アキラは「だー！」と言ってヒロキの胸を叩くが、ヒロキは舌を出しておどける。アキラは「早く(重いって)言え。」と言うが、ヒロキは「ちがうけどー。」と言うので、アキラはヒロキの肩を叩く。ヒロキは「水の周りに水ができて重い。」とにこにこ笑いながらとびなわを下におろす。それを見て、アキラはにこにこ笑い、ヒロキからとびなわを受け取ると、配膳台の上に置いて遊戯室を出て行く。ヒロキもアキラについて行く。

一方で、言い間違いをしたヒロキが、間違えた自分を笑い、アキラにもその笑いを向けたものの、アキラが執拗に嘲ると、我慢できなくなったヒロキは怒りを表し、それを見たアキラが黙るという場面もあった(エピソード10)。自分の失敗を笑いに変えたヒロキであったが、その失敗をユーモアとして共有するのではなく、攻撃として向けられることは、ヒロキにとって自尊心を傷つけられる思いだったのではないかと思われる。アキラにとっては、自分のツッコミに対して、ヒロキがユーモラスに、もしくは、ヒロキに笑わせるつもりはなくてもアキラにとっては面白い言動で返すヒロキが、この日に限っ

て怒りを示したことが驚きだったのではないだろうか。

エピソード10：アキラに怒るヒロキ

ヒロキ(6歳3か月)とアキラ(6歳10か月)が話している。2人の中にはユウコ(6歳0か月)が立っており、2人を見ている。ヒロキが「ぼく〇〇〇好きだよ」とアキラに言うと、アキラが「はい、だめー。」と言ったので、ヒロキは「どちて？」と言った後、「どちてって言っちゃった。」とアキラとユウコを見て、自分の言い間違いを笑う。するとユウコは「赤ちゃんだ。」とヒロキを指差す。ヒロキが「違う！」と言うと、アキラが「赤ちゃん赤ちゃん赤ちゃん赤ちゃん。」と繰り返す。ヒロキはアキラを叩いて帰りの支度をしに行くが、アキラはヒロキについていき執拗に「赤ちゃん赤ちゃん。」と言い続ける。ヒロキは、何か不満そうにぶつぶつ言いながらジャンパーを着ていたが、いつまでも「赤ちゃん。」と繰り返すアキラに向かって、立ち上がって「おー！！」と叫び、足を床に踏みつける。アキラはヒロキをじっと見、言うのを止める。

(2) 介入後(エピソード11~13)

「攻撃に対するヒロキの大きな抵抗とヒロキをかばう仲間の姿：自己主張と対等な仲間関係構築段階」

介入後の期間は、年中児と年少児の観察が中心であったため、年中児と年少児の午睡時間(約2時間)にあたる年長組の自由時間が観察対象となっている。そのため、介入後は、クラス全体の仲間関係よりも、ヒロキが自ら遊び相手を選択しやすい環境下での仲間関係が中心の記録となった。

観察は、介入開始約2週間後に2回(17日後と19日後)、1か月後に1回行った。介入後の自由時間におけるヒロキの仲間関係を、図2に示す。担任は周囲と協働的に保育を行い、以前より積極的にヒロキに関わるようになっていた。筆者の印象としても、ヒロキに対して園全体で見守っているという雰囲気を感じられた。

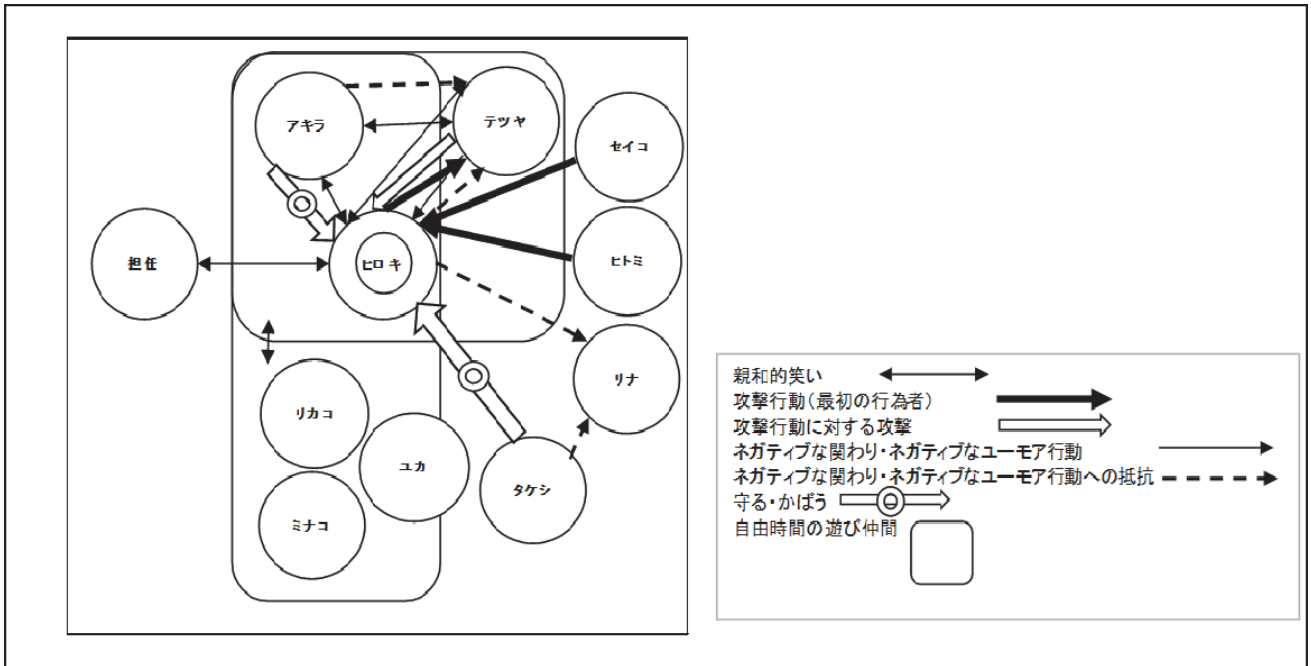


図2 介入後のヒロキの仲間関係（自由時間）

介入後の期間も、ヒロキに対してネガティブな態度を示す幼児はいるものの、ヒロキに対してネガティブで攻撃的な行動を示していたテツヤとリナに、ヒロキが抵抗するようになっていた。介入開始約2週間後、ヒロキに対して支配的な態度を示すリナをみて、ヒロキを擁護するタケシの姿も見られた（エピソード 11）。タケシがヒロキをリナからかばう行動は、間接的にリナのヒロキに対するネガティブな態度へ抵抗する行為になっていると思われる。

ヒロキに対する周囲の温かい変化が感じられる中、大きな事件が起こる。ヒロキが、テツヤの度の過ぎる態度に対して、初めて大きく反抗し、取っ組み合いの喧嘩になったのである（エピソード 12）。これまでのヒロキであれば、叩かれても黙って痛みを押し殺すかのように、しかめ顔をして辛さを訴えていたかもしれない。その様子が周囲にはユーモア行動と映り、ヒロキの痛みの表情に対して笑いが起き、ヒロキは笑われる対象でしかなかったように思われる。しかし、この日のヒロキは違っていた。テツヤの理不尽な行動に対し、体を張って「嫌だ」という思いをぶつけたのである。攻撃行動での主張は集団規範として許容できるものではないが、関わった K 保育士は、ヒロキが嫌な思いをしたことをクラス全員に伝え、テツヤと仲直りしたヒロキの優しさを褒めていた。

エピソード 11：ヒロキの抵抗に援護するタケシ
 ヒロキ(6歳4か月)は、アキラ(6歳10か月)が郵便ごっこでハガキを書いている横に座り、アキラを見ている。向こうでリナ(6歳5か月)が「ヒロキーヒロキーヒロキ！」と叫んで、ヒロキを呼ぶ。気付いたテツヤ(6歳2か月)が「ヒロキ君、リナちゃんヒロキ君のこと呼んでるよ。」と言うが、ヒロキは行こうとしない。テツヤはリナの所へ行くように促し、ヒロキは渋々リナの方へ向かうが、すぐに立ち止まり、にこにこ笑って振り向くと、テツヤに向かって歩く。テツヤは「行けー！」と言って、ヒロキをリナの方に向かせるが、ヒロキは嫌がり、リナとは反対の方向に歩く。その様子をじっと見ていたリナが「ヒロキ！」と叫んで自らヒロキの所へ行くと、「抜けるの？抜けるの？」と聞く。ヒロキが頷くと、リナは「抜けるなら、ちゃんと言って！アキラ君は言ったけど！」と強い口調で言う。その様子を見ていたタケシ(6歳6か月)がヒロキとリナの所へ、笑顔で走って2人に突進した後、リナと2人でにこにこ笑いながらじゃれ合う。ヒロキはしょんぼり下を向いているが、リナが離れると、タケシは「抜ける？」とヒロキに聞く。ヒロキが頷くと、タケシはリナの所へ行き「ヒロキ君、オレに言ったよ。」と伝える。ヒロキはアキラの所へ戻る。

エピソード 12：テツヤに対するヒロキの反発

テツヤ(6歳2か月)が牛乳パックで作ったブーメランを投げて遊んでいる。投げたブーメランを取りに行く途中で、床に座っていたヒロキ(6歳4か月)の横を通り過ぎる際、テツヤはヒロキの着ている上着のフードをヒロキの頭にかぶせると、にこにこ笑いながらヒロキを押し倒して行く。ヒロキは怒り、テツヤを追いかけ、泣きながらテツヤを叩く。叩かれたテツヤも負けずに叩き返し、2人は取っ組み合いになる。

見ていた私(筆者)が危険を感じるほどの取っ組み合いとなり、私がK保育士に知らせると、K保育士が2人の中に入り、2人を引き離して止める。しかし、テツヤの怒りは収まらず「オラー！バガー！！」と暴れる。ヒロキも「バガー！オラー！！」と言り返す。K保育士は「そんなこと言ってダメ！！」と強く言って2人を静めると、落ち着いて2人の話を聞く。ヒロキの頬に傷ができてしまったので、K保育士はヒロキを手当のために事務室に連れて行き、対応を別の保育士に任せ、K保育士はテツヤと話をする。ヒロキが戻ってくると、K保育士はヒロキとも話し、2人は仲直りする。その後、K保育士はクラス全体にもヒロキとテツヤの出来事を伝える。K保育士の横にヒロキを呼ぶと「男の子、強くなって、先生も止められないほどの喧嘩でした。でもね、仲直りしてね、ヒロキ君、許してくれました。そういう優しい気持ちも大切です。」と伝える。ヒロキが元の場所に戻っていくと、テツヤは笑顔でヒロキに話しかける。

介入開始1カ月後には、ヒロキともっとも仲の良いアキラが、ヒロキに対するテツヤの行動の誤りを指摘し、ヒロキを援護する場面も見られた(エピソード13)。

エピソード 13：テツヤに反論するアキラ

今日は大型積木を使わずに遊ぶことになり、片付けることになるが、その最中にヒロキ(6歳4か月)はその場をくるくる回り「フフ」と声を上げて笑う。気付いたテツヤ(6歳2か月)も笑顔でヒロキを見て、今度はテツヤが片足を軸にして回る。ヒロキは「こうだよ。」とくるくる回りながら離れていき、テツヤはピアノの椅子の上に腹這いになる。そこへ、担任保育士がやって来て「ねー、積木片づけるってどういうこと？ここもきれいに並べるってことだよ。ちゃんと片づけてね。」と伝える。テツヤとヒロキは片づけを再開するものの、ヒロキが大型積木で巨大郵便ポストを作ることを思いつく。「中に(手紙が)入れるように。」と言って、空間ができるように並べ始める。そこへアキラ(6歳11か月)が笑顔でやってきて、テツヤとにこにこ笑い合う。ヒロキはアキラとテツヤに指示を出し、2人はヒロキの指示に従って並べていく。出来上がると、アキラはにこにこ笑って、積木で囲った空間に入っていく。テツヤは積木の上に登り、郵便物を入れた時にその空間に落ちるか確認する。アキラが縦3列ではなく4列に並べようと言い出すと、ヒロキは「もっと長くしよう。」と言い、6列に並べることにする。並べ終えたアキラが「できたー」と笑顔で中に入っていくと、ヒロキも「よし、できたあ。」と言って中に入っていく。テツヤは2人を覗き込んで「ハハ」と声を上げて笑う。ヒロキが「ちょっとこれ、長すぎるんじゃないの？」と言うと、アキラは短くなるよう並べ直し、3人で遊び始める。そこへS保育士がやって来て「積木、今日使わないんじゃないんですか？」と言う。3人は保育士をじっと見て、ヒロキが頷くと、S保育士は「使ってるじゃない。約束ちゃんと守ってください。片づけてください。」と言うと、ヒロキは頷き片づけ始める。テツヤが「考えたのはヒロキくーん。」と言うと、それを聞いたアキラが「テツヤもだろ！」と口を尖らせて反論する。そして、3人で片づけ始める。

IV. 総合考察

笑った者にとっては温厚で善意なからかいであったとしても、それを受けた者にとっては、そのからかいが懲罰的に受け取られることがある¹¹⁾。コミュニケーションとしての笑いには、他者との親密感を深める“「協調」としての笑い”と、笑った方が優越感に浸り、笑われた方がみじめな思いをする“「攻撃」としての笑い”がある¹²⁾。笑いによって他者に不快感情を生起させることは、笑いの優越感情理論の中で長く扱われている笑いの攻撃的側面でもある¹³⁾。ヒロキは、物真似や物ボケなど、積極的に他者を笑わせるユーモアセンスがあり、ユーモア行動が多く見られる幼児であった。しかし、介入前のヒロキの仲間関係において、ヒロキを笑う者とヒロキの間には、「笑う—笑われる」という上下関係があったことは否めない。子どもたちは無意識であろうが、ヒロキがクラスの中で「笑ってもいい子」「いじってもいい子」になっていたように思われる。

そのようなヒロキに対する“気になる笑い”や“気になる様子”を感じていた園長や担任保育士を中心に、園内報告会でヒロキのことを話し合い、笑われる対象になりがちだったヒロキに対し、園全体で意識的に目を向けるようになった結果、笑われる対象から脱却していくヒロキの姿が見られるようになった。保育者集団が協働的にヒロキに目を向けることで、ヒロキ自身の自己肯定感が高まり、「笑われる」立場から、対等な仲間関係での「笑わせる」立場へと移行しつつあることを示唆する変化がみられた。また、どちらかというときアキラ主導の遊びを楽しんでいたヒロキが、エピソード13ではアキラとテツヤに、ヒロキが指示を出し、ヒロキの大型郵便ポストのイメージを具体化していく遊びが行われている。片付けなければいけない積木を片付けずに遊んでいることは、集団規範から逸脱した行為ではあるものの、ヒロキのイメージを共有し、アキラとテツヤが大型郵便ポストを作り上げようとする姿が見られ、さらに、片付けをせずに遊んでいることを注意された時、ヒロキに責任を転嫁しようとしたテツヤに対して、アキラは連帯責任であることをテツヤに主張していた。どちらも、テツヤとの大喧嘩の約2週間後のエピソードである。ヒロキを取り巻く仲間関係が、公平性に基づく対等な関係に変化しつつあることが推察される。

介入前の期間は、園と筆者とで事前に調整してい

たスケジュール上、年長組の観察期間であり、出迎えの時間から帰りの会まで、年長組を一日観察する期間であった。そのため、介入前は、集団行動が求められる時間も含めて観察することができ、ヒロキを取り巻くクラス全体の仲間関係を把握することができた。また、園長が、園内報告会を実施する日を設定したのは、年長組の一日観察の終了日にあたる日であり、年長組の観察が一区切りするタイミングでの園内報告会という形での周知が行われた。

介入後の期間は、年長組は自由時間のみの観察であったため、子どもたちが自分で遊び相手を選択することができる時間の記録に限定されていた。そのため、ヒロキに対する集団活動時間も含めたクラス全員の関わりの変化をみることはできなかったが、ヒロキとの関係性が強かったアキラがヒロキをかばう様子や、介入前にヒロキに対してネガティブな言動を度々示していたテツヤへのヒロキの大きな反抗と、それ以降、テツヤと仲良く遊ぶヒロキの様子が見られたことは、ヒロキを取り巻く仲間関係が変化したことを示唆するものと思われる。

しかし同時に、介入前の集団活動場面にヒロキに対する複数の幼児からのネガティブで攻撃的な行動が見られたり、介入後も他児からのネガティブな関わりが見られたりしていたことには留意しなければいけない。本観察の時期は、2~3月であり、小学校への接続期にあたる時期であった。児童期以降にいじめの問題が大きく取り上げることが多いが、人間関係の対立は幼児期から存在していることを考えると、社会に生きる子どもたちにおいて、人間関係のいざごは幼い時からの課題であるとも言える。学校は、対立が生じない環境づくりを目指す必要はなく、それよりも、対立が起きた時に、効果的に対処できる環境づくりを目指す方が良い¹⁴⁾という指摘があるように、幼児教育・保育が行われる場においても、子どもの人間関係の対立を適切に行える日頃からの園における環境づくりは重要であろう。

幼児期は、人格形成の基礎となる時期であるからこそ、異質な者や考え方の違う者への対応、他者の感じ方への配慮、痛みを自分に置き換えて共感することなどを養うために、幼児期のいじめ防止教育として、保育者は日々の子どもへの接し方や関係性を把握し、それに基づく的確な指導と教員相互の協力体制を構築することが課題となっている¹⁵⁾。本研究を行っていた当時、筆者は20代前半の修士課程の大学院生だった。まだまだ、研究者とも専門家とも言

えない立場であったにもかかわらず、筆者の観察データと「気になる」という感覚について、園長先生が真摯に受け止め、ヒロキへの対応を検討し、ヒロキに対する協力体制をとったことは、協働的保育を実現する事例として、特筆に値するだろう。

最後に、年度末に園長先生より、筆者に以下のような報告があったことを記し、本論を閉じたい。

ヒロキ君、修了式後も、毎日、保育所に来ていました。ヒロキ君にとって、最後の保育所で過ごす日となった今日、ヒロキ君の保護者の方から、お手紙をいただきました。保育所が大好きで、楽しく行くようになったこと、担任の先生へのお礼の手紙でした。ヒロキ君にとって、保育所が楽しい場所であったこと、嬉しく思いました。

謝辞

園での観察を受け入れてくださった子どもたち、先生方、及び関係者の皆様に心より感謝いたします。本事例を公表するにあたり、長きにわたって話し合いを続けてくださった当時の園長先生に御礼申し上げます。

付記

本研究は、JSPS 科研費 18K13185 により行いました。

注

- (1) 観察方法の詳細は、伊藤(2009)¹⁾を参照のこと。
本観察の時期は2～3月で、小学校入学を間近に控えた時期であった。実施にあたっての倫理的配慮として、全てのデータを匿名で処理すること、得られたデータは研究に必要ななくなった時点で破棄すること、ビデオによるデータは学会等で公開しないこと、研究への協力はいつでも中止できることを協力園と確認し、同意を得た。保護者に対しては、協力園の責任者を通じて研究目的とデータの取り扱いについて伝えていただき、研究への協力を依頼した。保護者からの質問等がある場合の連絡先は協力園にお願いし、責任者を通じて対応することとした。なお、本論で示される子どもの氏名は、全て仮名である。
- (2) 介入後は、ヒロキと年中児との関わりが2エピソード見られたが、本論ではヒロキと同じクラスの年長児に限定するため、分析から除外した。

引用・参考文献

- 1) 伊藤理絵・内藤俊史・本多薫(2009)「幼児にみられる攻撃的笑いについて—観察記録からの検討—」『笑い学研究』第16号, pp.114—118
- 2) 伊藤理絵(2012)「幼児の笑いを考える—笑いの攻撃性の観点から」『チャイルド・サイエンス (子ども学)』第8巻, pp.62—65
- 3) 伊藤理絵(2017)『笑いの攻撃性と社会的笑いの発達』広島：溪水社。
- 4) 畠山美穂・山崎晃(2002)「自由遊び場面における幼児の攻撃行動の観察研究：攻撃のタイプと性・仲間グループ内地位との関連」『発達心理学研究』第13巻, 第3号, pp. 252—260
- 5) 畠山美穂・山崎晃(2003)「幼児の攻撃・拒否的行動と保育者の対応に関する研究：参与観察を通して得られたいじめの実態」『発達心理学研究』第14巻, 第3号, pp. 284—293
- 6) 伊藤(2017), 前掲書, p.72
- 7) 上野行良(2003)『ユーモアの心理学—人間関係とパーソナリティ—』東京：サイエンス社。
- 8) 掘越紀香(2018)「幼児期におけるふざけ行動の意義」『子ども学』第6巻, 東京：萌文書林, pp.97—126
- 9) 伊藤理絵(2019)「食事場面における笑い—道徳教育としての食育からの検討—」『岡崎女子大学・岡崎女子短期大学 研究紀要』第52号, pp. 1—10
- 10) 伊藤理絵(2020)「子どもの社会的笑いと言語感情の発達—両面性から理解する—」『発達』第163号, pp.27—32
- 11) Billig, M. (2005) *Laughter and Ridicule: Towards a Social Critique of Humour* London: Sage. (鈴木聡志(訳)(2011)『笑いと言語 ユーモアのダークサイド』東京：新曜社。)
- 12) 井上宏(1984)『笑いの人間関係』東京：講談社。
- 13) Larkin-Galiñanes, C.(2017) An Overview of Humor Theory In A. Attardo. (ed.) *The Routledge Handbook of Language and Humor* (pp.4-16). New York: Routledge.
- 14) ジョン・ウィンズレイド&マイケル・ウィルアムズ(著)綾城初穂(訳)(2012/2016)『いじめ・暴力に向き合う学校づくり 対立を修復し、学びに変えるナラティブ・アプローチ』p. 1, 東京：新曜社。
- 15) 森田美芽(2017)「幼児期におけるいじめ防止教育に向けて—教育社会学の視点から—」大阪キリスト教短期大学紀要, 57, pp.22—34